

「追想紀言」 学習の記録 令和3年2月

⑩ 去歳兒歸_レ省山陰_一

去歳兒_一省山陰_一、聞_レ諸老僕、僕少時、嘗從_レ先考_一詣_レ讚州象頭山祠、儕輩數人俱焉、路次或遇_レ酒肆、輒將_レ入、先考禁_レ之、至_レ讚州、宿_レ祠下、淹留數日、招_レ妓置_レ酒、淫縱無_レ度、先考乃居_レ止別室、不_レ少亂、館主人、窃囑_レ僕、使_レ誘_レ先考、先考不_レ答、時在_レ燕集中、衆皆沉酣、先考乃頻顧曰、農務將_レ起、浚渠時節已至、邑民望_レ我輩歸_一日切、而遊惰如_レ此、爲_レ可憂也、僕在_レ坐後、聞_レ之惕然、不_レ復覺_レ酒肉之甜_一也、既而去、將_レ取_レ途大阪、先考堅執不_レ可、衆皆側_レ目、歸_レ家而後、始悔_レ其過、更互相咎曰、日者吾輩深見_レ狐惑、不_レ自知_一也、而惡_レ片山公、片山公而不_レ在、吾輩豈有_レ今日、皆服_レ其篤實謹嚴_一終_一先考之世、此輩適燕集、先考至、則肅然不_レ敢出_一口發_レ氣、

読み

去歳、兒山陰に帰省し、諸老僕に聞く。僕少時、嘗つて先考に従ひ、讚州象頭山祠に詣でる。儕輩數人と俱にす。路次で或酒肆に遇ふ。輒ち將に入らんとす。先考之を禁ず。讚州に至り、祠下に宿す、淹留數日、妓を招き、酒を置き、淫縱度無し。先考乃ち別室に居止し、少しも亂れず、館の主人、窃に僕に囑して、先考を誘わ使む、先考答えず、時は燕集中に在り衆皆沉酣す、先考乃ち頻顧して曰く、農務將に起きんとす、浚渠時節已に至る、邑民我輩の歸るを望む日切なり、而るに遊惰此の如く、憂ふべきと為す也。僕坐後に在り、之を聞き惕然とす、復酒肉の甜を覺へざる也、既而去り、將に途を大阪に取らんとす、先考堅執して可ならず、衆は皆目を側む、家に歸りて後、始めて其の過を悔む、更互に相咎めて曰く、日者吾輩深く狐惑を見て、自らを知らざる也、而るに片山公を惡む、片山公在らざれば、吾輩は豈に今日有らんや、皆其の篤實謹嚴に服す、先考の世は終わり、此輩適燕集し、先考に至らば、則ち肅然として敢へて口に出し氣を發せず。

訳

去歳、私は山陰に帰省した。その時にある老僕から聞いたことがある。(老)僕がまだ少年の頃、嘗つて父に従い讚州象頭山の祠に詣でたことがある。その時は仲間數人であった。旅の途中で酒を飲ませる店を見つけた。すぐに入ろうとした。私の父はこれを止めた。讚州に着き、神社の下に泊まった。滞在すること數日、妓を呼び、酒を飲み、好き勝手な振る舞いをしていた。私の父は別室に止まっております、少しも乱れなかった。館の主人は、ひそかに私に頼んで、父を誘わせた。父はそれに答えなかった。その時には、宴会の最中で、みんな酒に酔って狂ったようになつていた。父は憂いて言つた。田畑のしごとが將に始まろうとしている。田の溝さらえをするときも来ている。村人は私たちの歸るのを待ち望んでいる期限である。それであるのに、遊びなまけ、このようなことでは憂うべきことだ。僕後ろに座つていて、これを聞いて恐れ慎んだ。また、ご馳走のおいしさを感じなかった。しばらくしてそこを出発して、行先を大阪に取ろうとした。父は頑としてこれを許さなかった。みんなは憎んだりしながら横を向いてしまった。家に

帰ってから、初めてその過ちを悔い、お互いに反省して言った。先ごろは、私たちは深く迷いに中であって自分を見失っていて、片山公を憎んだりした。片山公がおられなかったら、吾らはどうして今日このようにおられるであろうか。皆は其の篤實謹嚴に敬服した。

父が亡くなると、この人たちは宴会をしても、父のことに話題が及ぶと、皆心から引きしまり、敢えて口に出したり自分たちの気持ちも出すことはなかった。

言葉

去歳Ⅱキヨサイ 昨年 去年

僕Ⅱボク 謙遜していうときの一人称代名詞

小時Ⅱショウジ 若いとき、幼少の時 祠Ⅱシ ほこら

儕輩Ⅱセイハイ サイハイ ともがら 仲間

路次Ⅱロジ ①旅のみち筋。②目的地にいく途中。③街道の休み所。

酒肆Ⅱシュン 酒を売る店 或Ⅱアル あるとき、ある

輒Ⅱスナワチ その度ごとに

淹留Ⅱエンリュウ 一か所に長く止まる 妓Ⅱ音曲や歌などのわざで客をもてな

す女性。芸者。乃Ⅱスナワチ そこでやっとなんそこでしたかたなく それなのに

淫Ⅱイン みだらな ほしいままに 縦Ⅱほしいままにする

度Ⅱほどあい 窃Ⅱセツ ひそかに 囑Ⅱシヨク 言いつける 言い含めて

沉Ⅱチン 沈の異体字 酗Ⅱク 酒に酔って荒れ狂ったようになる

頻顧Ⅱヒンシュク ひんしゆく顔をしかめる。うれえるさま

浚渠Ⅱシュンキョ 浚Ⅱシュン さらう 渠Ⅱキョ 溝

日切Ⅱヒギリ 約束・契約などの日数を限ること

切Ⅱセツ さしせまる 近づく 惕然Ⅱテキゼン ひやひやしておそれるさま

甜Ⅱテン 甘い 側Ⅱソバタテル 堅執Ⅱ※固執

側目Ⅱ目をそばむ まともに見たな 憎んだりねたんだりして横目で見る。

咎Ⅱトガム 日者Ⅱニツシャ さきごろ。かつて 更互Ⅱコウゴ

狐惑Ⅱコワク 疑って迷う

豈Ⅱあにくならんや、「どうして〜であろうか(まさかそんなことはあるまい)」

と訳す。強い肯定となる反語の意を示す。

適Ⅱテキ まさに たまたま

肅然Ⅱシュクゼン おごそかで、心が引き締まるさま